Side

きぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｉｄｅ

【Ｎコード】
Ｎ７８４１Ｋ

【作者名】
きぃ

【あらすじ】
「ヒーローＬＶ１」の番外編みたいな感じです。
まずは本編からお読みください。

アリアの場合（前書き）

小説「吉永さん家のガーゴイル」以降「吉永さん家」を参考にしております。

アリアの場合

「どうした？　早く、殺さないのか？」
「殺(ヤ)るわるよ！」

あいからず、こいつは楽しそうだ。
いや、あきらかにこの状況を楽しんでいる！

「そう言っているわりには、手が震えてるようだが・・・・・・？」

殺したい。
殺したい。

分かってる。
分かってるのに。

こいつを殺さなきゃいけないってことは。
それなのに。

手が動かない。
魔力が込められない。
「そちらが来ないのなら、こちらから行くぞ」

！

――。
『おい、そっちじゃないだろう』
えっ？
「こっちだ。ひかるちゃんの邪魔をするな」
「へいすみません。兄貴」

・・・・・・もしかして、あの子が呼んだ仲間？

「騒がしいな」
「なっ！　ちょっと、待ちなさいよ」
「なら、力づくで止めてみたらどうだ？」

――！

何も言えなかった。

闇夜に消えていったあいつに対して、あたしは何一つ言えなかった。
また・・・・・逃がしてしまった。

「――早く、帰ってきてよ」
夜だというのに、やたら騒がしい路地裏で1人立ち尽くしていた。

双葉の場合

「ガーゴイルかくごー！」
「また、来たのか？　喜一郎よ」

どおおん

「なんの何の騒ぎだよ？」
双葉は騒ぎを聞きつけ、ポニーテールをぱたぱたとはためかせ、家の窓から庭に飛び出した。

「げっ」
そこには見るも無残な庭の残骸があった。

これ見たらママ怒るよな・・・・・。
ある意味最強の人物を思い身震いを起こす。

「双葉か。いま、戦闘中に付き、あまり近づくでない」
「ああ、なに？　また百色か？」
「くそ、本気でやれ！」
「ってキー兄ちゃん？」

予想外すぎる。
いつもなら、“怪盗百色（ひゃくしき）”なのに。
「なに？　どうしたの」
「兄貴」
「あー！　ちょっと、なにやってるのガーくん」
兄貴は栗色の長い髪をなびかせて怒鳴る。
――だから、その女みたいなしぐさは止めろよ！

なよなよした兄を見てるとイラッとする。
女みたいな容姿だからよけいに。

「うぬ、すまぬ和己(かずみ)」
「大丈夫ですか？」
「ああ・・・・・・、くそ！」
「って、喜一郎さん！？」
あー。
兄貴もやっぱ気づいてなかったんだな。

それはそうだ。
いつものパターンなら、怪盗百色だもんな。

双葉の場合（後書き）

吉永双葉（９）

ガーゴイルにプロレス技を喰らわせるほど凶暴な少女。
ガキ大将でもある。

ガーゴイルの場合

「なんで、本気でやらないんだ！」
「この間も言ったであろう・・・・・・汝もまた我の家族だと」
悔しそうに己を睨みつけてくる喜一郎。
それはかつての家族を見る目ではない。

「それとも忘れたのか？　老いとは恐ろしいな」
「・・・・・・うるさい。守らなかったくせに」
幼い顔がさらに幼くなった。
外見だけは何一つ変わっていない。
あれから何十年も経っているのに。

「すまぬ」
「言っておくが、また壊しに来るからな」
「ああ、風邪を引かぬようにな」

ばさり。
喜一郎は軍服をマントのように、なびかせて立ち去っていった。
”喜一郎よ。いつまで、あの時代に縛られているのだ？”

「・・・・・・さて、どうしたものか？」
残されたのは見るも無残な庭の残骸のみ。

「取りあえず、がんばろうか？」
「やはり、我らで直すしかないのだな」

ガーゴイルの場合（後書き）

吉永　和己（１７）

外見と言動により１０割の確率で、少女に間違えられる男の子。

天祢の場合

「ほら、ほら、しっかり働く！」
「おい。なんで、ぼくばっかり働いてるんだ？」

朝早くにいきなり呼び出され、なんの用かと思えば、ただの重労働だった。
――なんで、ぼくがこんなことしてるんだ？
自分の店なんだから、自分で片付ければいいだろう。
だけど、それを言ったら、何をされるか分からない。
いや、分かりすぎて怖い。

高原はぼくを脅すように青龍刀を構えている。
こんなガキぽい女がぼくより、年上なのだからたまらない。

「そうだ。ひかるから聞いたか？　喜一郎くんの話」
ただ、働いてるだけではつまらないから、ちょっとした話題のつもりだった。
「あの子また、なにかやったの！？」
予想外の反応だ。
いや、当然かもしれない。

子供のことを気にしない親なんていない。
「いや、ひかると一緒に魔術師を救ったそうだ」
「そう」

高原はそれしか言わなかった。
彼女の目には涙が浮かんでいたが、見なかったことにしてやろう。

その姿はライバルではなく、一人の母親だった。

天祢の場合（後書き）

高原イヨ

８０年以上生きている子供ぽいお姉さん。

ひかるの場合

「アリアさん・・・・・・その」
なんて、声を掛けたらいいんだろう。
何を言っても、ただの気休めにしかならない。
「あたしね・・・・・・魔術に利用されたの」
「えっ？」
「でなきゃ、立たせる必要なんて無いでしょ」
「そんな」
「憎もうと思った。憎みたかった。でも、あたしは結局憎めなかった――」
「泣かないで」
私には抱きしめて、あげることしかできない。
彼女は小さな声で泣いていた。

「喜一郎くんも・・・・・・」
憎むのはもう止めてって、言いかけて止めた。
私が言うことじゃなかった。
戦争を語っていいのは、実際に体験した人だけだ。
「東宮。お前の言いたいことは分かる。
”だけど、忘れるわけにはいかないんだ”」
その言葉を聞いて、私の方が泣きそうだった。

喜一郎の場合（前書き）

吉永さん家は

現実＋ファンタジーな世界です。

喜一郎の場合

驚いた。
あいつはまだ門番を語っていた。

何もしなかったあいつが門番を語る姿は実にこっけいだった。

「この間も言ったであろう・・・・・・汝もまた我の家族だと」
何を言ってる？
お前は守らなかっただろう。
家族になるはずだったゆきを。

本当はずっと前から分かってる。
あいつのせいじゃないってことくらい。

だけど、どうしても。
どうしても。
許せないんだ。
ただ、存在していただけのあいつを。
“どうして、何もしなかった。”

＝あれー？　錬金術に興味あるの？＝
バカを言うな。
あいつには日本を守れるだけの力があったのに。
“何もしてくれなかったんだ。”

たとえそれが、母が作り出した物だったとしても、憎まずにはいられないんだ。

さらにアリアの場合

通常、魔術は魔力を込めることで発動させる。
だけど、それを発動させるためには、魔力と対価が必要だった。

それは禁術――。
けして行ってはいけないものだった。
そのことに気付いた時には、すでになにもかもが遅すぎた。

どうして？
どうしてなの？
どうして・・・・・・。

問いただしたい相手はもういない。
あのころと比べて、すっかり軽くなった体を抱きしめた。

「ありがとう」
あたしには殺せなかった。
あなたには感謝してるの。

だけど、これからもずっと、忘れない。
あの人のこと。

だって、憎めるわけないじゃない？

さらにアリアの場合（後書き）

ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7841k/

Side

2010年11月11日13時42分発行